

バチカンで国際会議 SGIが仏教団体として参画

2017年11月15日

国連、各国政府、市民社会の代表らが出席 SGI訪問団 ローマ教皇と謁見

核兵器のない世界への展望を巡る国際会議が10、11の両日（現地時間）、ローマ教皇庁・人間開発促進省（仮訳）が主催し、バチカン市国で開かれた。同会議の開催に協力したSGI（創価学会インタナショナル）からは、池田博正SGI副会長ら訪問団が出席した。会議初日には、参加者らがフランシスコ教皇と謁見。SGI副会長が会議の協力団体として招へいを受けた感謝と、池田大作先生からの伝言を伝えると、フランシスコ教皇は笑顔で応じた。また11日には、SGI副会長が「人間精神の变革」をテーマに登壇した。

バチカン市国は、イタリアの首都ローマの北西部に位置する。総面積は44ヘクタール。世界最小の独立国家である。

国家元首は、カトリック教会の最高指導者であるローマ教皇。現フランシスコ教皇はアルゼンチン生まれで、2013年、アメリカ大陸出身者としては初めて、第266代の教皇に選出された。「真の力とは奉仕である」との信念で、苦しむ人たちへのまなざしを大切にしていた行動を続けている。

本年1月、教皇のリーダーシップのもと、教皇庁にあった12の評議会のうち、「正義と平和評議会」など四つの評議会が統合され、環境、平和、人権、人道等の問題を担当する人間開発促進省（仮訳）が設置された。



核廃絶を巡る国際会議で発言する池田SGI副会長。SGIは、参加者中唯一の仏教団体として、生命尊厳の立場から核兵器を糾弾し、民衆の連帯で「核兵器のない世界」の実現をと呼び掛けた（11日、バチカン市国で）



[同記事の続きへ](#)

バチカンで国際会議 SGIが仏教団体として参画（1面から続く）

2017年11月15日

イタリア青年部から生まれた「核兵器はいらない」運動の展示も

[同記事の前部分へ](#)

人間開発促進省の設置に関わったシルヴァーノ・トマーシ教皇大使（前国連駐ジュネーブ常任代表）は、2014年にオーストリアのウィーンで開かれた核兵器の非人道性に関する国際会議で、SGIの代表と出会った。以来、核兵器廃絶を目指すSGIの草の根の運動を深く理解し、評価してきた。

そして今回、同省が主催した国際会議に、SGIは唯一の仏教団体として招へいを受けた。SGIのほか、パグウォッシュ会議、米ジョージタウン大学等が協力団体に名を連ね、政府や市民社会の代表、ノーベル平和賞受賞者などが世界各国から集った。



「この会議に参加している学生と若き専門家に感謝したい。未来の世代に正義と平和のメッセージを伝えるのは、あなたたちです」

2日間の会議は、人間開発促進省のピーター・タークソン長官による、この言葉で始まった。

初日（10日）に行われた謁見でのスピーチで、フランシスコ教皇は、核兵器の偶発的な事故の危険性を考慮するならば、その使用の威嚇や保有そのものも責められるべきであると指摘。核兵器に代表される大量破壊兵器は誤った安全保障観をもたらすだけであり、人類の平和的共生は、武器ではなく連帯の倫理によって醸成されねばならないと訴えた。

また同日午前には、バチカン市国のピエトロ・パロリン国務長官、グラミン銀行創設者のムハマド・ユヌス氏、国連の中満泉事務次長（軍縮担当上級代表）らが登壇。その後のセッションでは、4人のノーベル平和賞受賞者がスピーチした。

IAEA（国際原子力機関）前事務局長のモハメド・エルバラダイ氏、地雷禁止を求める活動をけん引したジョディ・ウィリアムズ氏に続き、今年と同賞受賞が決定したICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）のベアトリス・フィン事務局長は、7月に採択された核兵器禁止条



大聖堂のクーポラ（ドーム）から、ローマの街並みを望む



約は、核時代の「終わりの始まり」であると強調。核廃絶への道のりにおいて、信仰心は恐怖に支配された世界に希望を送り、暗闇に光をともしかであるとした。

アルゼンチンの人権活動家のアドルフォ・ペレス＝エスキベル博士は、社会的弱者の声を政治に届け、全ての人々が平等に自由を享受できる社会の建設をと訴えた。

会議2日目では、オランダの平和団体「PAX」のスージー・スナイダー氏が「市民社会の役割」をテーマに発表したほか、ノーベル平和賞受賞者のマイレッド・コリガン＝マグワイア氏らがスピーチした。

池田SGI副会長は「平和への道と証言」と題するセッションで、被爆者で日本原水爆被害者団体協議会事務局次長の和田征子氏らに続き発言した。

その中でSGI副会長は、縁によって変化する生命の可変性に触れ、人間精神の変革とは、生命の善性を顕現させていくことに通ずると主張。核廃絶とは核兵器を容認する“生命の魔性”との戦いであり、核軍縮という困難な課題への挑戦の中で、人間の生命の可能性が開花されるとの見方を示した。

また、核兵器の人道性を巡る議論を支えたのは、核問題は倫理的・道徳的な問題との視点であり、その意味で、宗教は積極的な役割を果たしてきたと強調。SGIも、「大切なものを守りたい」という感情を共有するという立脚点から、「核兵器なき世界への連帯」展を各国で開催し、誰もが始めることができる「対話」を手段として、市民社会での意識啓発と青年の育成に取り組んできたことを紹介した。

事実、例えばイタリアSGIの青年部の語らいから生まれた「センツアトミカ（核兵器はいらない）」運動は今、社会に広く浸透している。国際会議の期間中、同運動の展示が、会場内のホールで開かれた。

全てのプログラムを終えた参加者は、共に展示の観賞へ。パネルを1枚ずつ、丹念に見つめながら、会議の熱気のままに、議論を続けていた。

宗教や信条は異なっても、「平和を創る」という一点で協力できる。SGIの対話の取り組みは、一段とその地平を広げ、地道にして最も確かな平和の道を前進している。